コミュニティ往来

No.7
発行所　尼崎市水堂榎本20、榎本荘　今井方
月刊キブツ関西読者会

十月例会（24日Sun）の詳細は3頁にアリマース。

「備北キャンプ報告書」希望の方は若干のカンパを添えて上記マデ

"生活ヤ人生キヤ"

▼〈日常〉の視点からの〈共同体〉批判▲

〈共同体ブーム〉の中の〈共同体〉

①〈共同体ブーム〉と言われて久しい。しかし、〈共同体〉或いは〈コミューン〉の概念は、未だ曖昧であり混乱している。だからぼくらの大多数にとって、〈共同体〉は流行語（はやりことば）でしかない。

〈共同体志向〉と一般に言われるものも、漠然とした〈あこがれ〉か〈ユートピア信仰〉であることが多い。そのため、実際に〈協同体〉建設に取り組んだ時、集団づくりや集団内の人間関係維持が目的視されてしまうという例がよく見られる。

（注）社会学で言う〈共同体〉とは〈いえ〉〈むら〉など。〈協同体〉は人為的につくるものを指す。〈共同体運動〉とは、大雑把に言って、古い共同体の束縛から脱して協同体〈集団〉をつくり、それを地域社会にひろめ…共同体社会を目指す運動である、と言って差支えあるまい。

②『自由連合』29号のアンケートでみると、〈共同体〉のイメージは、およそ次のようなものである。

a 原始共産制　前近代的共同社会
b 共同生活　共同労働
c なかよしサークル
d ユートピア　桃源郷
e 逃避　敗残者集団

ここにも混乱ぶりが現れている。

しかし、このアンケートの他の設問に対する回答などを考え合わせてみると、これらのイメージは、どれもある一つのことを無意識のうちにも前提にしていることがわかる。

③それは、言わば〈共同体〉＝山間僻地での農業協同体〉という考え方である。このことは〈共同体ブーム〉と言われているものが、実は〈ヤマギシ会ブーム〉であることと深く関連している。

〈内なる共同体〉の意味

④そのような〈共同体〉は、ぼくのそれと根本的に異なっているようだ。なぜなら、ぼくにとって、〈共同体〉とは、何よりもまず〈生活日常〉の問題であるからだ。

10・8ショックを受けて街頭闘争にとび込み…というわきまりのコースをぼくも歩んだ。そこで思い知らされたのは、自分の〈闘争〉に〈根〉がなかったことだった。言うならば〈生活不在〉、〈日常性欠如〉である。そして、「共産主義共同労働団」を言う滝田パルチに強く魅せられた。ぼくの〈共同体〉はそこから始まる。

⑤〈生活身辺〉から離れた所で〈協同体〉をつくるという志向性は、今のところぼくには全くない。ぼくのかかえている問題は、いま自分の居るその〈場〉を、どのようにして〈その時・共同体〉にしていくのか、ということなのだ。

『自由連合』29号で、ぼくが「内なる共同体」というタイトルを敢えてつけたのも、その意識からだ。31号で向井孝の言う「見えない共同体」も、そういうことではないかと思っている。

〈備北〉夏季キャンプでの問題

⑥〈備北〉夏季キャンプで「シラケ組合」なる分派(?)ができ、〈秩序〉をめぐって対立があったらしい。この問題を「秩序か無秩序か」として把えるのは、おそらくあまりうまいことではないだろう。

九月定例会で、ぼくはこれを〈日常〉の視点から批判した。と言うのは、「酒盛り」に象徴的に現れる彼らの主張・行動を次のように把えたからだ――彼らは自らの生活の場を**そのまま**わいてわいて、一時的にそこから離れ、息抜きの場として〈備北〉に行っている。援農キャンプは彼らにとって「合宿」「お祭り行事」である――と。

⑦どのような〈共同体運動〉であれ、それは〈生活日常〉のあり方を〈生きざま〉を向い続けるはずだ。なぜなら、〈共同体運動〉は「日常生活のレベルで、自分たちの生活空間を創り出そうとする社会運動」であり、「政治的日常――権力秩序に対して共同体的秩序――非暴力的日常を対置しようとする」ものだからである。そしてそれは〈日常闘争〉を通してのみつくられる。

〈日常闘争〉とは、よく言われるような意味での「闘争の日常化」のことではない。それでは「風化したバリケード」の二の舞となる。

日常身辺で〈生活点で、生産点で〉

日常的にいつも、くり返し）、自分が〈たとえ一でも〉…何を、どのように…やるのか。それが問題となってくる。このことは「内なる共同体」以来のテーマでありながら、先へ進めないでいる。だが、この問題をぬきにしての〈共同体〉は、遂に〈あこがれ〉以上のものとはなりえない。

⑧ そもそも〈共同体〉が変革力と魅力をもちうるのは、その〈日常革命性〉の故なのだ。（変革力をもたない共同体はぼくには無縁だ。）

ところが、〈共同体〉を〈自分の日常と隔絶した非日常空間〉と考え、〈備北〉に関ったのが「シラケ組合」の人たちである。そうした関り方は、その〈空間〉を支えている人たちに依存してしかありえない。そのことは、彼らが、その主張する「主人（あるじ）」にはなりえず、〈観客〉でしかないことを、同時に物語っている。

〈脱体制＝叛逆〉への自己投企〉

⑨「シラケ組合」的傾向を〈脱体制〉と呼ぶことがある。だがそれは、個人の側から一方的に断絶しているにすぎず、実際に体制から脱しているわけではない。つまり、ドロップアウト（実際に逃げる、はみ出ること）ではなく逃避（背を向ける、眼をそらす、眼をつむること）でしかない。

ドロップアウトは、それ自体、国家権力の威信を低下させ、体制を強びす。そうさせまいとする国家をふりきって逃げ出すことは〈闘い〉であるし、〈闘い〉ぬきに国家をふりきることはできない。

⑩ しかし、ドロップアウトも、結局は日常性に超えられてしまう。〈脱体制〉は非日常的なものであり脱っぱなしではなく、もとの日常に回帰してくるからだ。

〈体制から脱すること＝叛逆〉への自己投企〉は、日常から飛翔して自由の彼方へ去ることではなく、日常という地面からの跳躍のくり返しであるのかも知れない。そのくり返しは、日常という地面に足をつけているからこそできるのである。

その跳躍は、足の位置を移動させ、新しい視点を与える。それは日常という地面そのものを変革する必要を気づかせ、国家に絡めとられている日常を、自分の手に取り戻す第一歩となる。

⑪『思想の科学』109号で三島次郎が挙げるゲーリー・スナイダーやアレン・ギンズバーグなどは、この跳躍をくり返すことによって、日常を組みかえた例と言えるだろう。

反動から出発し、次から次へと日常性を拒否していって、行き着くところは、やはり日常であり、その日常性を引き受けるところから生活としてのヒッピーは始まるという。求めるものは秩序。新しい関係、自律、責任、仕事、作業、引き受けること。事務やオルガナイザーや経済をバカにしてはヒッピーも成り立ちえない。秩序にキョーミのないヒッピーは風俗として消えるのみ…〈逃避〉＝所謂〈脱体制〉は、日常人の反動のみで、足の位置や視点の変化に気づかず、非日常下の〈食の自由＝自分が束縛されていると感じないこと〉を楽しむだけで終ってしまう。

〈反権力・反国家運動〉として

⑫ こうして〈日常〉ということを強調するのは、〈共同体〉は〈日常〉と切り離せないものだ、ということが忘れられているからである。

〈共同体〉を〈日常〉のものとして把えるためには、山間僻地の農業経営や共同生活と結びついているイメージを一度捨ててかかることが必要だ。〈生活身辺〉の微視的な状況を、生活技術と事務のレベルから組みかえ変革することで、自己周辺の〈政治的日常〉を把え直し、〈生活日常〉を創り出す。それが、現存する〈協同体〉と呼応する〈視えない共同体〉であり、（もう一つの）〈共同体運動〉だということを、はっきり意識しなければならない。

⑬ この文章は、一つの問題提起であると同時に、〈共同体ズーム〉や〈共同体志向〉に対する批判でもある。〈非日常〉的な（そして〈政治〉的な）発想は、「シラケ組合」や「CRCL」だけでなく、〈共同体志向〉者の殆んどすべてに見られる。この批判はそれらの人すべてに向けられたものである。

「逃避だ」「闘いの放棄だ」という批判に応えるためにも、〈協同体〉での〈日常革命性〉を獲得することと、〈生活身辺〉を〈視えない共同体〉に組みかえることを、相呼応して行なわなければならない。

それに取組んだ時、はじめて〈共同体運動〉は、強力な〈政治闘争的力〉をもつ〈反権力・反国家運動〉となるのである。（杉原哲生）

びほくたより
―こうらんきつみたて―

8月20日、スクリュー式耕運機の中古を購入。十万円也。セッセと貯めて、たてかえを返金してゆきたいのれす！

現在高三三九〇〇円（繰越22500、10月分2,400）。マダマダれえす。送金は〈振替岡山一二四六九今日眞治〉で！